
‘人形’の聖機士

白い犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

‘人形’の聖機士

【Nコード】

N7614I

【作者名】

白い犬

【あらすじ】

‘聖機人’と呼ばれる兵器とそれを扱う聖機士たちの物語。

森で（前書き）

ファンタジー学園物で、準ハーレム、主人公チートですが戦闘パートやシリアスパートがあるので飽きずに楽しんで貰えたらいいです。

森で

「……………来たぞ」

短く響いた声は暗い森に飲み込まれた

「『聖機人』の相手は貴様に任す。」

木々の間には『異物』が三つある。

どうやらこの声はそこから聞こえるようだ

「聞いているのか!？」

異物は巨大な半透明な球で、その中には人の骨組みのようなものが入っている

「聞いていますよ。心配せずとも『私たち』は命令には従います」

「ふん、まあいい。ならば貴様が先行しろ。」

私は『あれ』の死角に回る。」

そう言うと異物の一つが動きだした。

中の人型が球から出ようとし、それに引っ張られた球が膜のように人型に引っつく

「おい『人形』その小僧もしっかり使えよ」

そこには青く巨大な騎士が立っていた。

先程まで引っ付いていた膜が人型に融合して青い装甲を成していた

のだ

「それでは私は行く。

……小僧、貴様の居るべき場所、に戻りたいのならば逃げ出したりしないことだな」

キュイン、という風を切る音を残して青騎士は飛んでいった

「……俺は帰る……」

帰るんだ……絶対……みんなのところに」

「ケンシ君、大丈夫ですか？」

「へ、へいきだよ。

だってこれが終われば帰れるんだ」

「そうですね。

それでは私達も始めましょう。」

残りの二つの球も先程の青騎士と同様に変化し始めたが、その後に残ったのは二体の異業。

それぞれの頭部には目、口、角があり、そのうえ尾もついていて怪獣のように見える。

「タバサ、なんで仮面騎士は自分の王様を殺そうとするのかな。」

白い怪物はそう言いながら近くにあった剣を拾い上げる

「うーん、だいたいの予想はつきませんが、私は‘人形’で目的な
んで教えてもらえませんか」

黒い怪物は翼を広げた

「・・・そっか・・・」

「まあ、別に理由がどうであっても私達には関係ない事です」

「・・・・・・・・」

「時間です。行きますよ」

ズシャン、と地を蹴り二機の聖騎士は飛び立った。

訓練所にて（前書き）

次回戦闘です

訓練所にて

〽数日前

「ハアアアアアア！！」

ガシュンツ！

パターン、と訓練用の擬似聖機人人形が音をたてて崩れる。

「〔ミッション・コンプリート！〕」

手

に持っていた刀を鞘に戻すと、何処からか聞き慣れた電子音が聞こえてきた。

「ハア、ハア、ハア、、、」

若干息を荒げながら周りを見渡す。

広々としたスペースがある訓練場には聖機人人形の残骸が無数に散らばっている。

《この世界に来てからずっとこんなことをしてるな、、、》

数カ月前に元の世界から飛ばされてから今まで、この訓練施設で聖機士として戦えるよう、ひたすら人形と闘い続けている。

《言う事を聞いていれば、帰してくれるって言っていたけど》

それは、この施設で一番偉いと思われる、‘仮面騎士’と名乗る人の言葉だ。

信用出来るかどうかはわからないけれど、今はそれを信じるしかない。

「どうかしたんですか？先程からまったく動きませんが。」

シュイン！

突然、声が聞こえてきたことに驚きながらも、刀を抜き、切っ先を声の主に向ける。

過大評価するわけではないが、自分の能力は常人の粹を逸脱していると思う。

それは索敵に関しても言えることで、こんなに接近されるまで気が付かないなんてありえない。

《黒い聖機人？》

「ドールなの？」

それは、少し前に会った緑髪の少女の名前だ。

彼女とは施設のミーティングルームで出会い、そのあと色々話をした。

なんでも、彼女は聖機士であるとか。
そして自分の聖機人は黒色をしているとか。

そして、これから自分が参加するという作戦に、彼女も参加するんだとか。

「いいえ、

違いますよ。」

返ってきたのは否定の言葉。 少し人を小ばかにするような中性的な声をしている。

「じゃあ誰、

次の相手？」

今日はもういつものノルマ分の訓練は終わっていて、今から新車の相手をするのは勘弁してほしかった。

とは言え、一機ならば瞬間で破壊できるが、、

「それも違います。

私はただ、あなたを呼びにきただけですよ。」

「なにかあったの？」

「なにかが起きたわけではありませんが、メンバーが揃ったので、そろそろあなたにも、お越しただきたく、、」

《呼びにきただけか。》

「わかった。」

そう応えると、大切な事を思い出した。

「……名前。」

「なにか言いましたか？」

「名前！何て言うの？」

少し強い言い方をしてしまったがきにしない。

「私のことは、タバサ、とお呼びください。
マサキ・ケンシ君？」

それが、タバサと話したはじめての時だった。

戦闘で（前書き）

やたら早いです。

戦闘で

キイイイイイイン

と、風を切る音が響き渡る。

ケンシ達の目の前では、‘空飛ぶ島’が、かなりの速度で飛行している。

この島は、‘スワン’と呼ばれる大型飛行船で、表面は芝や木で覆われていて、そこには大きな西洋風な城がたっている。まるで、昔映画でみた‘空飛ぶお城’のようだ。

「そろそろしかけます。準備は宜しいですか？」
隣を飛ぶタバサから通信がはいる。

「・・・うん。」

正直、いつまでも準備などしたくはない。

これから自分がすることは、人として最もやってはならないことだ。いくら元の世界に帰るためとはいえ、自分のためにそんな事をしようとするなんて、最低な人間だ。

《姉さんたちは、どう思うかな。》

故郷にいる姉達の顔が思い出される。

「それでは、着陸します。遅れないでくださいね。」

「わかった。」

よく考えてみると、自分は どうしてしまったのだろう。

訓練を受けていたときは、もっと気持ちに余裕があった。

それこそ、こんな計画を持ち掛けられたら、元の世界に戻る手掛

かりを失っても止めただろう。それが今はどうだ？自分から参加している。帰る、ということにここまで強迫性をもったのはタバサに会ってからだ。ケンシが割と本気でタバサマインドコントロール説について考えていると地面がまじかにせまっていた。

ガシンッ！

という音をたてて、ターゲットの居るであろう城部分まで少し距離のある場所に着陸した。

今回の作戦は実行班と陽動班に別れて行われる。

ケンシ達の任務は敵聖機人の陽動で、ターゲットは仮面騎士が始末することになっていた。だから敵が来るまで少し暇なので、ケンシはタバサにさっき考えていたことをきいてみることにした。

「タバサって人の心を操ることってできる？」

身も蓋

も無い言い方だが、十五にもなっていない自分が、二枚舌な雰囲気をかもし出しているタバサに、探りを入れて情報を引き出せはしないだろう、という考えからきた言葉だった。

「出来ますよ。とは言え無から有を作れないのといっしょで、深い信念や後悔を元にしなければできませんが。あつ！ちなみに、ケンシ君にもかけていますよ。」

身も蓋も無い聞き方にこれまた、身も蓋も無い答え方でかえされ、面食らうがこれだけは言わなければならなかった。

「なにしてんだよ！そんなもの解いてよー！」
ケンシが本気で怒鳴り付ける。

それが本当なら、暗示を解いて、今からでもこんなことはやめたいのだ。

「それは出来ませんよ、私もケンシ君に暗示を掛けるよう、暗示を掛けられていますか

ら。」

自分の意思が他人にうごかされているというのに、さもそれが当然のことであるかのように言う。

「そ、そんな、タバサはそれでい　「その聖機人！　これはこの船がシュトレイク興国ラシヤラ陛下のものを知つてのことか！？」

いいの？　と言おうとして、鋭い女性の声に阻まれる。

思っていたよりも、長く話していたようで、眼前には大剣を構えた赤い聖機人が立っていた。

「ケンシ君、話しはあとにして、いまは戦いに集中してください。」

戦ってからじゃ遅いんだー！　といったかったが、敵さんがもうやる気まんまんオーラを出していてそれどころじゃなさそうだ。

それに、暗示によつて闘えー、闘えー、と急かされた気分になり、自然な動きで刀を抜いてしまった。

しまったー！　と刀を抜いたことに後悔するも、こちらに戦闘意思があると思つた、赤い聖機人が切り掛かってきた。

「ハアアアアアア！　」カキイイン！

《お、重い！》

地面を一蹴りしただけで距離を縮めた速さに驚き、まともに受け止めてしまった。

《まずい！　刀に負荷がかかりすぎてる。》

本来、細身の刀で超質量の大剣の一撃を受ければ、それだけで刀は叩き折られてしまう。

そうならなかったのは、ケンシの腕前があつてのことだ。

割と余裕が無くなって、一振りもつかないなどと考えていると

「よくそんな剣で私の一撃を受けれたな！

だが、これならどうだー！」

赤い聖機人が再び突進してくる。

速度が上がっているところを見ると、さっきのは手加減されていたようだ。

ブオン、

その一撃をかわす。

ブオン、ブオン、

二振り、三振り、連撃を全て紙一重でよける。

「っ、なに！」

おそらく今のは彼女の最大技量をもつてした、必殺の太刀だったのだらう。

内心ヒヤヒヤだったが、それを全てかわすと大きな隙ができた。

最後の二振りをかわすと同時に身を捻り、尻尾で相手の腹部を薙ぐ。ズムッ！

と食い込むような音がした後、赤い聖機人が吹き飛んでいく。

「キャアアア！！」

女性特有の悲鳴を上げて、受け身も取れずに、ズシヤツ、と地面を滑る。

普通はここで追撃するところだが、別にこの人を倒すことが目的ではないのでそれはしない。

「っ、流星は、尻尾付き、というところか。」

立ち上がり再び大剣を構える、、、、が。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！

突如として、城の方から聞こえた爆音に構えを崩す。

仮面騎士がターゲットの抹殺にかかったようだ

「ラシヤラ様！！！」

彼女の主の名だろうか、叫びながら城へ向かおうとするが。

「行かせませんよ。」

タバサが回り込こみ、それを許さない。

「チツ、貴様達は囷か！？邪魔をするな！！！」

赤い聖機人が危機迫る勢いで黒い聖機人に切り掛かる。

余裕なのだろうか、黒い聖機人は身動き一つしない。すると、

ズシャン

何かが断ち切られる音と一緒に、黒い腕が飛んでいく。

「グアアアアア！」

声を上げて、黒い聖機人が切られた箇所をおさえてうずくまる。

「ハア？」

ハモってしまった。

悪魔のような形の聖機人が一撃でやられるという、シユールな光景を見れば反応が被るのは無理ないかもしれない。

赤い聖機人の動きが止まる。その隙に今度は自分が回り込む。

「しまった！」

少し遅れて、女性の思考も回復したようだ。

タバサの弱さには驚いたが、自分だけでもこの女性の相手は十分可能なので、逃げられなかっただけで良しとしよう。

「クソっ！ 白いの！！ 貴様も切られなくなったらそこを退け！」

女性が吠える。

だが、通すわけにはいかない。

オとか言いながら、まだうずくまっているし。

分なら駆け寄って行って介抱しようとするだろうけど、、、あ

れ？ 自信がもてない？ ところでもう一度タバサをみる。

タバサは、グオ

普段の自

痛みのせいなのだろうか？翼で全身を抱きしめるようにしているそれは、恐持ての芋虫のようだ。

そんなどうでもいいことを考えていると、赤い聖機人が目茶苦茶に剣を振り回してきた。

余程焦っているようで、ブオオオオン、ブオオオオン、と凄いい音がしている。

しかし、その目茶苦茶な太刀筋も、一振り一振りは必殺の威力を秘めているため、先程よりも危険な相手になっている。

「ウオオオオオオ！」

怒涛の斬撃が降り注ぐ。

これだけ無茶な動きを続けていればすぐに、‘可動限界’を迎えるだろう。

‘可動限界’とは、聖機人の動力源である‘亜法結界炉’から出る‘亜法’に聖機士が耐えられる最長時間だ。

亜法は人体に有害なもので、それに耐えきれなくなった聖機士は気を失い、聖機人は‘コクーン’と呼ばれる球形の待機状態に戻ってしまう。

「何故命中しない！！」

もう女性の頭には可動限界のことなんてないのだろう。まったくペースを落とすことなく切り掛かる。

そんなとき、

「キヤイヤ〜、そんな目茶苦茶やってたらもたないよ〜。」

馬鹿にしたような、呆れたような声が響く。

「ワウ・ワンリーか!？」

何故貴様が此処にいる!？」

「ご挨拶じゃな〜い。」

折角あなたのご主人様を助けて、こうして援護にまできてあげたのに。」

《ということは、仮面騎士は失敗したのかな》

城の方を見ると、ボロボロになった青い聖機人が黒い聖機人に背負われて、撤退していくのが見える。

あの黒いのはドールかな、なんて考えていると、

「おい!小僧!貴様達がすっかり困になっていないから失敗したではないか!私に引くが、貴様達は責任をとって、ラシヤラを殺せ!！」

仮面騎士から通信がはいった。

しかし、何と言う理不尽。作戦会議の時は、この船には聖機人は一体しか乗っていないということだったのに、伏兵が潜んでいることに気が付かず突っ込んだやつを責任を押し付けられるとは。まあ、自分は手柄が欲しいわけではないから別にいいが。

バァァァン!

「よっしや〜!命中、命中。やっぱり火薬の力はすごいね〜。」

振り返ると、両腕が無くなったタバサがふらふらしている。もう、おまえなにしに来たんだよ。といたいのを堪える

「そっちはもういいわ。この白いのを二人でやるわよ。」

「了解。」

今度は自分の番のようだ。

新しく現れた茶色い聖機人が手に持った巨大な銃の銃口をこちらに向け、赤い聖機人が突進してくる。

ブオン、

その一撃を最小限の動きでかわし、赤い聖機人に接近する。

これは攻撃が目的ではなく、そうしなければ茶色い聖機人に狙い撃ちされるからだ。

「もう！キヤイヤ、邪魔！」

「じゃ、邪魔って！」

私がいなきゃ、こいつあんたに切り掛かってたわよ！」

「わかったから早くどいて。」

「なによ、わかったわよ。」

《今だ！》

茶色い聖機人の射線からタバサが外れる。

「タバサ！ターゲットのところへ！！」

「わかりました。」

さっきまでふらふらしていたタバサが、今はしっかりと立ち、飛び立とうとしている。さっきまでののは全部嘘だったのかと思わせるほど、キリッ、とした声で応えられるが、ぶっちゃけどうでもいい。

「なぐんちゃってね。」

茶色い聖機人が射線にタバサをとらえる。

《しまっ！》

ヒュー、

と進んでいく弾のど真ん前に立ち、

ズバン！

バアアアン！と爆風が襲い掛かる。

「ちょっと、ちょっと。爆弾叩き切るなんて正気？」

そう言う内にタバサは飛んでいった。去り際に振り向いて、悪魔顔がウインクしたようにみえたが、気にしない。

「ま、まずい！」

キヤイヤと呼ばれた女性が後を追おうとする。

さすがに通すわけにもいかないの、その前に立ち塞がる。

先程の爆発で、刀を折られたが、無手の体術が元々自分の戦闘スタイルなので何とかなるだろう。

赤い聖機人の攻撃をいなし、牽制するが、イマイチ決定力がたりず、そのうえ絶妙な場所に射撃をくらい、どんどん押されしまう。

やむを得ず、赤い聖機人を捨て置き、茶色い聖機人の元へ駆ける。

これは賭けだ。

もしここで赤い聖機人が茶色い聖機人を見捨て、タバサを追えば作

戦はしつぱいする。

だが、そうはならなかった。

赤い聖機人は、自分と茶色い聖機人の間に割って入り大剣を薙ぐ。

また、さっきまでと同じような戦況となったが、茶色い聖機人との距離は縮まった。

《この距離なら。》

リミッターを解除する。

キィイン、という音をたてて、亜法結界炉から大量の亜法がもれだす。

「ぐううう、うえっ！」

思ったよりも亜法酔いが激しい。早くしないとすぐにダメになりそうだ。

シュツ、

赤い聖機人の脇を一瞬で抜け、茶色い聖機人の頭を掴む。

グオオオオオオオオン、

え、何？聖機人つて吠えるの？と自分でも何をしたのかよくわからないが、さらに亜法結界炉が速く回りだし、亜法が体外にも放出される。

「ち、ちびつちやいそ〜。」

ふざけているのか、本気なのか解らないが、震える声でそう言うと、大量の亜法を浴びたその聖機人は意識を飛ばし、聖機人はコク

ーンにもどっていった。

グルルルルル、

と、止まれ！止まれよ！　なんて、某有名アニメのようなセリフを地で言いながら、何とか亜法結界炉を止めようとする。

しかし、止まる気配は全く見られず、亜法酔いでグロッキーになっているところに大剣が降ってきた。　ギリギリのところかわしたが腕を一本もっていかれ、もうどうにでもなれ、と残った腕がむしやらに振り回した。

「バ、バカな、、」

赤い聖機人の四肢が飛ぶ。

ガシャン、と胴体パーツが地面に落ちると、ようやく亜法結界炉の暴走はおさまった。

機体が耐えられなかったのだろう、ダメージを与えられたわけではないのに、残っていた片腕が粉々に砕ける。

「うえっ、うえええええええ！　　っ、ハア、ハア」

限界だ。という感じで意識を朦朧ぼろぼろとさせながらも城に向って走りだす。

後ろで、聖機人から出てきた赤髪の女性が、止まれ、と言っているようだがよく聞き取れない。

ダッ、ダッ、ダッ、

しばらく走ると、タバサのコーンが見えてきた。

その位置からしてタバサが何処に居るのかだいたいの予想がつく。

そういえば、と今回のことを振り返ると、タバサが本当に何もしていないことがよくわかる。

もしかして、ターゲットに振り返り討ちにあったりしてないだろうか？
不安になって、急ぎ聖機人を破棄し、走り出す。

「うっ、うおえっ！」

酷い亜法酔いで足元が覚束ない（おぼつかない）が、がんばって走る。ターゲットに振り返り討ちに遭え、とまでは言わないが、がんばってる自分がこれほど苦しんでいるのに、タバサが飄々（ひょうひょう）としていたら納得がいかない。

程よくタバサが苦しんでいますように、と願を掛けながら最後の扉を開いた。

・
・
・
・
・

そこには、十歳ぐらいの金髪少女にマウントを取られ、ボコ殴りにされている緑髪少年タバサがいた、

なんだかんだで

扉を開けると、美少年の上に美少女がまたがっていた。

周りには、薔薇の花びらだらうか、が落ちていて、アダルティックな雰囲気をかもしだしている。

少年は濡れた瞳で、少女を見上げる、

というか、泣いている。そりゃもう凄じ勢いでガンガン泣いている。

ガン泣き、そうガン泣きだ。

「ず、ずびばぜん！」

かんべん、じでくださいー！」

「なぐを言っとるか！おぬしには、聞きたいことがあるのじゃ。このていどで音を上上げるでないわ！」

バギィッ、ドゴオッ、グシヤッ、

生々しい音が響く度に花びらが増えていく。

ああ、これは血があゝ、なんて割れそつに痛む頭で考える。

ん？血？ 一気に頭が覚醒する。

「タバサー！！！」

その声に驚いたのか、金髪少女が一瞬、ビクッ、となる。

タバサはそのすきに少女の束縛から抜け出した。

「ケンシくん!!」

痣だらけの顔に満面の笑みを浮かべ、こちらに走ってくる。
鼻水をはじめとした、色々な液体で、何て言うか、顔テカリすぎ
じゃね? って状態での笑顔はまさに輝いていた。

「大丈夫!??」

床に付着している分だけでも、かなりの出血量だ。痣でわかり
ずらいが、顔色も悪い。

「ええ、何とか。」

それよりも、ケンシ君、彼女がターゲットです。『 やっちゃって
ください。』

ターゲットって、まだ子供じゃないか!!

言おうとするが全身に力がはいらない。

はいらないはずなのに、足は少女の方へ向かう。

『これが終わったら帰れるんだ。』
『……何処からか、声がする。』

『……もうすぐ帰れるんだ。』
『……やめろ、聞きたく
ない。』

『……イツを……せば帰れ……やめろ!』

「白い聖機人の聖機士か? おぬし程の男に殺されるのなら悪くは
ない。」

少女は不敵な笑みを浮かべる。

この少女はなにを言っているんだ? 何故これから自分を殺すで

あろう男に笑いかける？

それより、なににより、何故俺はこの少女を殺す？

.....

『ソイツをコロシて家に.....「黙れよ!!!」』

目の前で突然大声を出した男に、びっくり仰天している少女。

「ごめんね〜、と驚かしてしまったことに謝罪したいが、さっきよ
り、さらに頭痛がひどくなってそれができない。」

「ぐあああああつ、」

やばい、泣きそう！

いや、もう泣いてる？

頭の中がグシャグシャで思考が一つにまとまらない。

近くでタバサが、そんな！？ とか、バカな！？ とか言ってるけど、今はそれどころではない。

段々と意識がハッキリとしてきて、それと同時に体に力が戻る。

しかも、さっきまで自分の意思を捻曲げようとしていた、声の存在を感じない。

振り返ってどういいうことか、タバサに聞こうとするが、

「.....へ？」

「さっきの小僧なら逃げたぞ？ どうやら、おぬしは置き去りにされたようじゃな。」

あんにやろう！と、沸々と沸き上がる怒りを抑えて、離脱していく
黒い聖機人を見る。

「まだ、我を殺そうとするか？」

「そんなことしない。」

「じゃあ何故こんなところまでできた？」

「いや、操られちゃって、何て言っても信じてもらえないわけがない。だが、あえて言おう、」

「あ、操られて、、？」

「しまったー！疑問みたいなアクセントつけちゃった！これじゃ、よけい信憑性がなくなってしまう。」

「そんなわけあるか！ん、いや、ちょっと待て。」

「やっぱりダメか、と落胆していると、少女が首のうらすじを見てくる。」

「亜法酔いでふらふらだとはいえ、こんな少女に接近を許すなんて、」

「あつた！亜法陣じゃ！」

少女が聞き慣れない単語を、嬉しそうに言う。

「よし。おぬしを信じてやろう。」

「な、なんだって、てな感じで半信半疑に驚ろく。」

「なんで？」

「聞いた事があるのじゃよ。人心を操る古代文明の遺産が発掘されたという話しを。」

「そんな物があるなんて！でもそんなものを持っているなんて、実はタバサって偉い？」

「で？こんなもの誰に掛けられた？」

「タバサ、、、ああ、、、さっきの男の子。」

「は、は、は、その装置はこのスワンほども大きさがあると聞くぞ。一個人が所有できるものではないわ。」

「でも、、、」

「まあ、この亜法陣をおぬしに付けたのはそやつかもしれないが、実際に操作していたのはもっと大勢の人間が関わってるだろいよ。」
「なんと！自分一人のために戦艦ほどの大きな敷地と、大勢の人ががんばっていたとは。」

そんなことを考えていると、突然、ドカツ、という音がして耳のおくが熱くなった。

おお、、、地面が近い。どうやら倒れてしまったようだ。

起きようとするが、だんだんまぶたが閉じてくる。近くで、女の子が誰かを叱るようなこえが聞こえるが、そこで意識が途絶えた。

××××××××××××

目を覚ますと、鳥籠とりかごの中にいた。金色の鉄柵てつさくごしには、怒りの表情を浮かべた赤髪の美女が居て、すげー怖えー、なんて思っていると、

「っち、ラシヤラ様を呼んでくるから、ちょっとまってなさい。」

突然、舌打ちした後どこかへ行ってしまった。

なんだかなー、と辺りを見渡す。

ただっ広い部屋に自分が入っている金色の鳥籠だけが、ポツーンと

置いてある以外、他には何も無い。
確か自分は少女と話しをしていたようなく、と今おかれている状態
について熟考する。

しばらくすると、先程の女性が金髪の少女をつれて、部屋に入っ
てきた。

「おお！目が覚めたか！？」

「ラシャラ様！近寄ってはいけません。何か病気を持っているかも
しれません！」

こつちに来ようとした少女を女性がとめる。

病気なんて持ってないやい！と、女性の不躰なことばに訂正をい
れようと思ったが、先に言うことがある。

「ここは？」

「取り調べ室だと思ってもらってかまわないわ。」

なんと！いつのまにか自分は捕まっていたようだ。

「まずはじめに聞くけど、あんた何者？誰の差し金？ 数少ない男
性聖機士、しかもあれだけの力をもった者を暗殺者として使うなん
て正気じゃないわ。」

「それは・・・「キヤイヤ！何度言えば解るのじゃ！そやつは暗殺
者ではなくだな」

「それは聞きました。暗示を掛けられていたって言いましたよね。

人の心を操る装置だなんて、そんな眉つばな話し信じられま
すか！それに、万が一、そんなものがあつたとしても、この少年に垂

法陣なんて何処にもなかったじゃないですか。」

「昨日はあったのじゃ！無いのは洗脳がとけたからじゃ！それに、そやつに我を殺す気があれば、おぬしがくるまえに我は死んでおったわ。」

がみがみ言い争う二人に、なんと声をかけたものかな〜と考える。下手に会話に混ざろうものなら、集中攻撃を受けかねない。ここは一先ずくだらない小話でも、と自分の持ちネタをはなそうとする、

「昔、むか・「まあ善い。とりあえず、おぬしの名前を聞かせてくれんか？」……。」

……な、なんてタイミングが悪いんだ！ どうやら、言い争いは終わったようで、自分に会話が振られたのと同時に話し出してしまった。

「ん？ すまん。なにかいったか？」

「べつ、別に／＼。」

恥ずかしいが構うもんか。 顔の赤いのをごまかすために、キリッ、と応える、

「マサキ・ケンシ。」

「変わった名じゃな？」

我はラシヤラ。その怖い顔の女はキヤイヤじゃ。して、ケンシよ、おぬしが何者なのか説明出来ることだけでも話してくれんか？」

少女はなんだか友好的な感じだが、女性の方は、白状しなきゃ殺す！ 的な目で睨んでくる。

マジでこの人怖い。 まあ秘密にする必要もないので勿体振らずに言い放つ、

「マサキ・ケンシ。
何ヶ月か前からこの世界にきた、まあ、こっちの言葉で言うところの異世界人。 ここに来るまでは聖機士としての訓練を受けてた。」

「なぜ聖機士の訓練を？」

「言う事を聞けば元の世界に帰してくれるって言うってたから。」

「何処の国の組織じゃ？」

「わからない。その訓練施設から出た事もなかったし、何も話されなかったから。」

「おぬしの知っている限りの組織の情報をおしえてくれ。」

「施設に出入りしていたのは数人で、多分一番偉いのが仮面騎士と呼ばれてる、今回の作戦にもいた青い聖機人の聖機士。他に知ってるのは、昨日？、君がボコボコにした黒い聖機人の聖機士のタバサと、もう一機の黒い聖機人の聖機士ドール。俺が知ってるのはこれぐらいだよ。」

「そうか。」

説明が終わると、ラシヤラは顎に手を当て、何やら考え始める。隣にいるキヤイヤも睨むのをやめて、難しい顔で考え始めた。すると、

「よしっ!」

と元気な声が響く。

「ケンシよ、おぬしを我が従者にしてやろう。」

「っ! ラシヤラ様!?!」

ラシヤラの発言にキヤイヤが驚く。無理もない。ほんの数時間前、族として乗り込んで来た男を配下に置こうとしているのだ。それは無いだろ、と自分の事ながら現実味の無い話を訝しむ。

「ラシヤラ様、それはいけません。ソイツは嘘をついてます!」

「う、嘘なんて、、」

「アンタは黙ってなさい!」

お、怒られた、

「コイツ、異世界人とか言いしましたが、次の召喚はもっと先のはずです。ラシヤラ様だって分かっているでしょう?」

「ああ。だが、召喚以外の要因で異世界の物がこちらにわたってくる事もある。人が来ていても不思議ではあるまい?」

「しかし、」

「それにのう。」

いったん言葉を区切った後、高らかに言い放つ、

「これほど力をもった聖機士じゃ！いい商売になるとは思わんか！？」

キヤイヤはしばらくボー然としたが、自信満々といった様子の子のラシヤラを見て笑みを漏らす。

「わかりました。ですが、飛行中に従者が増えるなんて、他の者達にはどう説明なさるんですか？言っておきますけど、うちの姉もさっきこの船に乗り込んで来たんですよ？」

「メザイヤか、あやつとワウ・ワンリー、ユライトには、族を追跡して森を探索している時に不信な少年を発見。尋問して無関係だとわかったが、帰る場所が無いという。そこで慈悲深い我がこやつを召し抱えた、と説明すればよい。鵜呑みにはしないだろうが、それを声に出すほど奴らは愚かではないからな。」

「では、そのように。」

「それで良いな、ケンシ？」

やっと自分に話しがまわってきたと思ったら、拒否権のない確認。これを断れば、この場で処刑されてもおかしくない。とすれば答は一つ。

「はい！ラシヤラ様！」

とてもいい笑顔で応えた。

××××××××××××

仮面騎士がくだらない作戦に対してくだらない言い訳をはじめる。精神力、指揮能力ともに無い訳ではない。しかし、聖機士としては致命的な可動限界が短いという欠点があり、そのせいで焦りがあるようだ。

「落ち着いて下さい。ダグマイアさん。」

「黙れ人形が！貴様のせいであの異世界人を失ったのではないか！」

あの男の息子もこんなものか、、、

まあ良い。小物には我が復讐の贄となってもらおう。

俺は俺をこんな肉体にしたやつらを許さない。なあ、ゾヴォル・

ディアス？

なんだかんだで（後書き）

次回から視点が変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7614i/>

‘人形’の聖機士

2010年10月11日21時19分発行